

北陸大学図書館報

Bulletin NO.37

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 雑感

村山 次哉
(薬学部教授・図書館委員会副委員長)

⇒ 平成26年度図書館委員紹介

⇒ 寄贈図書

⇒ ブックポストの設置

利用学生の声

⇒ 薬学部の図書館

吉田 依里
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 読書について

吉村 彩芽
(未来創造学部 国際教養学科 2年次生)

⇒ 目次

北陸大学図書館報



雑感

薬学部教授・図書館委員会副委員長 村山 次哉



過日図書館のスタッフの方から電話があり「図書館報に載せるので、寄稿文を書いてほしい」旨言われた。内容は何でも良いからとの事。この手の文章を書くのは大の苦手なことから、できる事なら辞退したいと答えた。しかし、次の会議の席で再度依頼され、どうも断る事はできないような雰囲気である。何でも良いというのが最も厄介であり、かえって構えてしまう。

そこで、図書館報ということで、記憶に残った本との出会いをいくつか拾ってみる事にした。私は、そんなに読書をする方ではなく、どちらかという子供頃より、身体を動かす方が好きだった。しかし、時に何かに憑かれたように籠り、読みふける時がある。理由は解らない。たぶん躰が欲する時があるのだろう。なぜかそんな時に読んだ本は、よく覚えている。

小学校の時に読んだ本の記憶では、『アムンゼン物語』がある。ノルウェーの探検家で、犬ぞりを使って人類史上初めて南極点へ到達し、その後、飛行船で北極点への到達にも成功し、世界で初めて両極点への到達を果たしたヒトの伝記物語である。鹿児島(鹿児島県)の山奥の小さな小学校（私のクラスメートは21人だった）の図書室の片隅で時間を忘れて読みふけり（夕方、校長先生と父が探しに来て、怒られた）、感動し、興奮した事が思い出される。あれから30数年後の46歳の時、北欧を訪れる機会があり、ノルウェー・オスロのアムンゼン博物館まで足を延ばし、あの時の感動に再びふれる事ができた時、読書のもつ素晴らしさを痛感した。

中学校での鮮明に記憶に残る本は、あの『野口英世』である。担任にすすめられた一冊で、引きずり込まれるようにして読んだ。偉大な日本人科学者に感動すると同時にいくつかの疑問点も残ったので、その後関係する本を読みあさったのを覚えている。その結果私は、彼は純粹で偉大な微生物学研究者であったと信じている。全ての科学者がこのような純粹な研究者であれば、昨今の某研究所事件みたいな事は、起きることもなかっただろうにと思う。成果第一主義の昨今の研究環境は、科学や生物学の本来の姿からずれているように感じる。科学研究はもう少し長いスパンでみる必要があるだろう。この本との出会いが、私の人生に大きなインパクトを与えたと思っている。これまでに会津若松市を訪れる度に野口の史跡を訪ね、自分への戒めとしている。

高校時代の読書で最も記憶に残っているのは、壺井栄の『二十四の瞳』である。ふと目に留まりあらずじをめぐって見ると、戦前戦後の時代背景での田舎の小学校での出来事を中心に書かれたものであり、何となく共感するものがあつたのか、一気に読んだ。瀬戸内海の小さな島の寒村の小学校に新卒で赴任し、1年生12人の担任となつたおなご先生に、子供達はすぐになついたが、保守的な大人達からは敬遠されていた。そんなある日、おなご先生は子供達の作った落とし穴に落ちてアキレス腱を断裂し、学校に来られなくなった。責任を感じた子供達は、親に内緒で山の向こうの隣町のおなご先生の家まで、歩いて泣きべそかきながら会いに行く。そんな子供達の純な気持ちに心を打たれ、本を読んで初めて涙した。村では

大騒ぎになったが、そんな子供達の先生を慕う一途な気持ちを知った大人達の態度が、やがて少しずつ軟化していき、ようやく受け入れられていった。時は過ぎ、白髪となったおなご先生を囲み、戦争等でなくなった生徒も含めた同窓会が催された。教える事の難しさと楽しさ、教育の原点を考えさせる一冊でもある。

現代の若者は、だんだん本を読まなくなっているという報道があった。その理由は何だろうか？現代人の生活スタイルは、画像と電波の文化にどっぷり浸かっての生活である。おそらく、私も今の時代に生まれれば、同じ結果になっていたと思う。我々の世代は、幸か不幸か活字の文化の時代に生まれ育ったために、まだテレビさえも少ない時代であり、情報を得ようと思えば本を読む以外に方法はなかったのである。画像と活字、どちらにも一長一短あろうが、想像力を豊かにするにはやはり活字の文化ではないだろうか。

読書を始めると、いつしか主人公になり、自分の好きな脚色をし、創造に浸って行く。この時が何事にも代え難い、誰にも邪魔されない至福の一時でもある。

平成26年度図書館委員紹介

松本 和彦	図書館長、紀要編集委員長	副学長、未来創造学部教授
村山 次哉	副委員長	薬学部教授
山崎 博久	読書感想文コンクール審査委員長	未来創造学部教授
安田 優	紀要編集委員、読書感想文コンクール審査委員	未来創造学部准教授
東 康彦	紀要編集委員、読書感想文コンクール審査委員	薬学部講師
毎田千恵子	紀要編集委員、読書感想文コンクール審査委員	薬学部助教
川端 健司	紀要編集委員、読書感想文コンクール審査委員	未来創造学部助教

寄贈図書

本学の教職員等から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	冊数	寄贈者
「三月の招待状」ほか	計6冊	泉 洋成 (理事)
「骨粗鬆症標準用語集」ほか	計8冊	三浦 雅一 (薬学部長)
「Alice in wonderland」ほか	計9冊	J.D. デニス (未来創造学部教授)
「老いてこそ人生」ほか	計3冊	南野 茂 (事務局長)

ブックポストの設置

7月28日(月)、図書館本館にブックポストを設置しました。これまでは図書館が閉館している時には本の返却が出来ませんでしたが、これからはブックポストをご利用ください。ただし、CDやDVDはブックポストには入れずに、図書館が開館している時に受付カウンターにお返しください。



利用学生の声

薬学部の図書館

薬学部 薬学科 3年次生 吉田 依里



私は薬学部の図書館が大好きです。木でできていて、植物もあって、ここの雰囲気はとても落ち着きます。新聞や小説、洋書、DVDなど他にも色んなものがあります。

教科書よりも詳しく書かれた本がたくさんあるので、授業で習ったことをもっと深く知りたいときは、図書館で調べればとても理解が深まります。

学会や世界最先端の研究に関する雑誌、論文などもあります。2、3年生で専門的な授業が増えてきたので、このような一見難しそうな本を読んでも、中には理解できる内容もあり、自分が今勉強していることがいかに重要か実感できます。そして、勉強して知識を定着させたからこそ、それを理解できるので、勉強してきてよかった、もっと勉強を頑張ろうという前向きな気持ちになります。

今は薬剤師を目指して必死に勉強していますが、習ったことを理解して、自分のものにするので精一杯です。実務実習もこれからで、臨床的なことはまだまだ分かっていません。だから、自分が目指している先には患者さんがいるということを忘れてただ勉強を必死にやっつけてしまいます。以前図書館で、病気に苦しんだ人が書いた本を見つけ、その人がどれほど辛い思いをしたかを感じました。病気で辛いというのは容易に想像できるかもしれませんが、実際にその人たちが書いた本を読むのと読まないのでは自分の気持ちや考えに大きく違いがありました。患者さんの気持ちを完全には理解できなくても、理解しようとするのが大切だと思います。このような本を読むことは患者の立場になって考えられることにつながると思います。

そして、読書をするると視野や世界観が広がります。自分が知らないところや見えていないところ、意識していないところではこんなことが起きているんだと、本を読むたびに感じます。知見を広めると、それが別のところで出てきたり、こんな考え方があったな、など他の場面で応用できることがよくあります。

だから、本を読むことで世界観が広がって、自分の成長になっていると思います。また、図書館にある専門的な本を読んで理解できると、自分の成長が実感できます。

大学生は積極的に学ばなければいけないと色々な先生がおっしゃいます。薬剤師のライセンスを目標にするのではなく、6年制薬学部に通って修士課程と同じ扱いになるのだから、サイエンスを理解し、その中間点として国家試験があるという先生の考えも印象的でした。先生たちの言葉から、自分で勉強する大切さをより強く感じています。

図書館は大学生という自ら学ぶ姿勢を持つ人にはとっておきの場所です。

自習スペースでは同じ目標を持った人たちが勉強しているのを見て、自分もやる気が出ます。そうしてお互い刺激し合ってみんなで上にあがっていければ理想的だと思います。私にとって図書館は自分を奮い立たせてくれる、そんな環境でもあります。

読書について

未来創造学部 国際教養学科 2年次生 吉村 彩芽



現代の若者の活字離れが叫ばれる中、なぜ読書がそこまで重要視されるのか。日本では、小さい頃から本に触れることは大切だと考えられている。小学校、中学校、さらには高校でも、授業以外に「読書の時間」を設けるケースが増えている。また、平成13年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行されていることから、読書が大切だと考えられていることがわかる。ではなぜ読書は大切なのか。

読書から得られるものは知識だけではない。本を読むことによって、自ら考える力や想像力、集中力などが鍛えられる。幼い頃から集中力を養うことは、勉強やスポーツなど様々な面で良い結果をもたらす。また、言葉遣いや漢字の勉強にもなり、語彙も増える。語彙が増えれば、文を書くのに役立つ。最近の子供は読書よりもテレビやゲームに夢中になる傾向がある。読書では文脈から想像をしなければならないが、テレビやゲームではただ映像を見るだけで、脳を使って想像力を働かせることにはならない。読書をするのが大切だとはわかっているが、実際に読書はしないという子供が多くいる。携帯電話やゲームの普及で、子供たちが本と触れ合う機会が随分減った。しかし、このように読書は教育に必要な要素を多数兼ね備えているので、学校側も生徒・学生に読書をする機会を与える取り組みを行っているのだろう。

読書は子供の頃だけでなく、社会に出てからも重要視されている。そのため、就職後のために、大学でも読書をするようによく言われている。ここで重要になるのは「知識」と「表現力」だ。社会に出ると常に「知っている」ことが当たり前とされる。そのために読書が必要不可欠となるのだ。しかし、ただ「知識」を持っていればいいのではなく、それをどのように活かすかが問題だ。たとえば、いかにたくさんの本を読んで就職活動に挑んでも、それをうまく自分の言葉で表現することができなければ意味がない。しかし、本を読むことによって、普段自分が使わないような言い回しや役立つ表現を得て、表現力を高めることもできるのだ。

読書はただ何かを得るだけでなく、自分の考え方を変わるかもしれない。それは、いつもとはまた違った方向から世界を見ることができからだ。一冊の本には、その分野だけでなく、違う分野からも情報がつまっていることが多い。これが本の大きな利点だ。何かを調べる時、インターネットを使えばすぐに出てくるが、インターネットは本と比較して視野が狭い。確かに自分の調べたいことはすぐに出てくるが、それ以上のものは得られないだろう。読書によって視野が広がると、自分の偏った考え方や価値観に気づくかもしれない。就職などの目的のためでなく、自ら好んで本を読むことは人によっては難しいかもしれないが、自発的に読書をする方が自然に良い知識を蓄えることができるだろう。



北陸大学図書館報 NO.37 平成26年9月10日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/establishment/library

※北陸大学図書館報は、大学ホームページでもご覧いただけます。